四

雨が降り出してきた。風も唸りを上げて駆け巡っていた。嵐になりそうだった。それもかなり大きな。李逵はもう数度目の攻撃に耐えていた。東汾山兵は、既にその三分の一を失っている。今日の攻防だけで、五十近くの犠牲を出していた。残りは二百。よくもっているとは言えるが、犠牲の数だけはさすがに多かった。陳達の目も血走っていた。もともと豪胆な男だったが、今は、これまでにないくらい勇猛な戦いをしていた。敵禁軍の都虞侯には敗れたようだが、そんな痛手を感じさせないほどの戦いぶりだった。もう一人、果敢に敵陣に突っ込んでいる若者がいた。李逵の知らない若者だった。

「薛覇ですな」

後ろから声がした。董超だった。董超も今は馬を降りて、得物の長槍を、徒歩で扱いやすい短めの槍に持ち替えていた。

「ずいぶんと元気がいい」

李逵が満足そうに言った。

「もともとは商家の三男坊だったのですが、親が官戸※に騙されて破産、父母と二人の兄は自殺し、薛覇一人だけ残されたのです。その騙した官戸に復讐しようとして失敗し、東汾山に逃げ込んで来たのです」

※官戸　大地主である形勢戸のうち、官僚を出している家。富と権力の両方を握っていた。

「ふうむ、商家の出か」

李逵は何か考えていたようだったが、それを口には出さなかった。

「それにしてもしつこいな。もう何度目の攻めになる」

「六度目かと」

「そうか、奴らまだ諦める気はないらしい。公孫勝殿も獅子奮迅の戦いだ」

木戸の前の広場で、公孫勝が短梢子を振るっているのが見える。

「本来二本使うのだろうが、いまだ一本だけで戦っておる。まだ余裕

があるということだ」
「本気を出していないとも言えますな」
「その通りだ。公孫勝殿が短梢子を二本使う時は、いよいよここも陥ちるという時なのだろうな」
李逵が淡々と言った。陥ちる時。李逵はそれも視野に入れていた。陥ちた時にどう逃がすか。それが、李逵にとっても頭の痛い問題だった。公孫勝に任すしかない。結局、答えはそこに落ち着くのだった。自分にもっと知恵があれば。李逵は心の底からそう思った。
「もうすぐ交代の時刻ですな」
董超が、場違いなほどのんびりとした口調で言った。
「この雨では、疲れも溜まっておるだろう」
本来公孫勝は、裏の道を警護するはずだった。だが、禁軍の執拗な猛攻を見かねて、表に出て来ざるを得なかったのだった。李逵と董超、公孫勝と陳達が組んで、二刻※毎に交代で木戸の外に戦いに出ていた。兵や馬が潰れるのを避けるためだった。次々と新たな兵を繰り出せる敵と違って、こちらは圧倒的に数が少ない。予備の兵など一人も残っていない。ぎりぎりの戦いだ。李逵はそう思っていた。
雨がいよいよ強くなってきた。雲はその厚みを増したようで、辺りは夕暮れのように闇が漂い始めている。※二刻　約一時間。
「そろそろ馬は使えなくなりますな」
董超が言った。
「土がぬかるんできておる。儂らは徒歩で戦うぞ」
李逵は、そう董超に言った。
交代といっても休めるわけではなかった。こちらの攻撃をかい潜り、敵は間断なく木戸を攻め立てる。それを虱潰しに叩き落していく。これはこれで大変だったが、それでも、木戸の外に出て戦うよりはまだ楽と言えた。
公孫勝が、歩兵の兜を一呼吸で三つ潰すのが見えた。相変わらずの腕の冴えだった。公孫勝が味方でなかったら。李逵は慌ててその思いを振り払った。自分一人では、とてもここまではもちこたえられなか

った。それだけははっきりしている。
陳達と薛覇、それに聞起と陳統が、一気に敵を半里※ほど押し込んだ。公孫勝が引き返して、一の木戸の門を潜った。禁軍は押し返そうとする気配を見せなかった。※半里　約二百五十メートル。
公孫勝は、李逵の前で残月から降りた。
「残月が気に入ったようだな」
李逵はそう言いながら、残月の首筋を撫でた。
「素晴しい馬だ。これほど賢く、これほど強い馬はまずいないだろう」
「公孫勝殿、残月がほしくなったのでは」
李逵が嬉しそうに訊いた。
「確かにその通りだが、宋雪華殿にとっては、かけがえのない友なのだと思う。残念だが諦めるしかない」
公孫勝は、本当に残念そうだった。それを見て李逵は、これまで以上に公孫勝を信頼している自分に気付いた。
「あの杜愔という将軍は手強い。挑発にも乗らぬし、罠にも用心している。厳しい戦いになりそうだ」
公孫勝が言った。
「名将と言われておる。簡単にはいかんだろう。だが、罠も檑木は効いた。百人以上は潰せた。それだけでもよしとせねば」
「それは分かっているが、何か決定的な仕掛けがないかと考えている」
「公孫勝殿、こうなってしまえば、もう根比べのようなものだ。意地と意地のぶつかり合いだ」
「負けるわけにはいかない」
「そういうことだ。後は儂らに任せてくれ。二刻しか休みをやれんが、百人ほどの首は飛ばしてみせる」
「李逵殿なら出来るだろう」
「公孫勝殿のように器用ではない。だから儂は、儂の出来ることをするだけだ」
公孫勝は少し苦笑して、李逵達の後姿を見送った。
「陳達殿、少しの間ここを離れる。後は頼む」

公孫勝は、そう言い残して二の木戸を越えた。暫く前から、曹瑛の姿が見えなかった。雨に当たって身体が冷えたのだろうか。それなら、自分か李逵に、何か言い残しているはずだった。そういうことには特にしっかりしている娘だ。

胸を締め付けるような嫌な予感が、突然公孫勝を襲った。まさか。まさか、曹瑛……。

もっと速く。初めて公孫勝は、残月の横腹を蹴った。

・・・・・

太原府の南門が、もう間近に見えていた。雨は強さを増し、風もごうごうと、唸るような音をたてて吹き荒れている。遠くで白い閃光が瞬き、暫くして、雷の音が地を震わせた。

「春雷」

曹瑛は、思わず口に出していた。

南門を守る兵士達が、首を竦めて監視所に入っていくのが見える。この嵐は絶好の機会。曹瑛はそう思った。兵士達は、よほどのことがない限り、監視所から出ては来ないだろう。こっそり近付けば、誰にも見咎められずに済みそうだった。たとえ見付かっても、女一人だった。どうにでも言い逃れは出来る。曹瑛はそう心を決めた。

水月が鼻を寄せて来た。曹瑛は水月の鼻面を撫でた。

「水月、今までありがとう。おまえにはずいぶんと助けてもらったわ」

水月がいなければ、ここまで楽には亀伏山を抜け出せなかったろう。水月は、弦月と同じくらいに俊敏な馬だった。罠などは、こちらが注意する前に気付いてしまう。

「わたしは行かなければならないの。ここでお別れ」

水月は、曹瑛に身体を押し付けてきた。行かせたくない。そう言っているかのようだった。

「水月、これは仕方のないことなの。誰かがしなくてはならないこと。皆を死なせたくない。だから、わたしが行く。それは当然のことなの」

曹瑛は、そう水月に語りかけていた。水月は、ますます曹瑛にすり寄ってきた。南門への道を塞ぐような位置だった。逆らうことなどなかった水月が、今は必死に曹瑛を止めようとしている。曹瑛の心の奥に、熱いものがこみ上げてきた。曹瑛は、水月の首に腕をまわした。水月の暖かい鼻息が、首に心地よかった。

「もう行くね、水月。あなたといれて幸せだったわ」

曹瑛は、手綱を繋がずに水月に別れを告げた。水月は、ずっと待っている、そんな目をして曹瑛を見詰めていた。

南門の手前までは、誰にも見咎められなかった。門は開いたままだった。こんな嵐に通る酔狂な民などいない。そう思っているようだった。確かに人っ子一人見えなかった。人だけでなく、いつもうろついている犬の姿も見えなかった。曹瑛は、肩に掛けた矢壺から、矢を三本取り出した。三本までなら、一呼吸で射ることが出来る。矢は、きっちり百本用意している。軽く短い矢なので、肩に食い込むほどの重さではなかった。ただし、鏃にはたっぷりと毒を塗っておいた。憐憫はかけない。曹瑛は、そう心に決めていた。

慎重に門を潜り抜けた。城壁の上の監視所から、兵達の話し声が聞こえてきた。上司の悪口を話し合っているようだった。これだけの嵐の中でも聞こえてくるのだから、相当大声で話し合っているようだった。今なら気付かれない。曹瑛はそう思った。

一気に南門を離れた。喉が破れそうな勢いで駆け抜けた。一番近い民家の裏に駆け込んだ。ここなら、城壁の監視所からは見えない。心の臓が、早鐘を打つように高鳴っていた。

「何をびくびくしているの、曹瑛。こんなことじゃ、やるべきことも出来ないじゃない」

曹瑛は、自分で自分を叱咤した。そうでもしない限り、この耐え難い重圧に、立ち向かうことが出来そうにないからだった。

「いい、曹瑛。気持ちをしっかり持つの。そうすれば、矢の狙いも定まるわ。心が揺れていたら、矢も逸れる。そうしたら、ここまで来た意味がない。落ち着くこと。それが大事」

曹瑛は、声に出して自分を励ました。
民家の表に出て、そのまま宮城への道を辿った。慣れ親しんだ道程だった。大粒の雨が叩きつけるように降り注ぎ、姿を見られたくない曹瑛には、かえって好都合だった。太原府には丁字路が多い。それも、姿を隠すのにはいい案配だった。
辻から辻へ。曹瑛は小走りに宮城に向かって進んで行った。笠をかぶっていないので、雨が顔に当たると痛いほどだった。とても、上を向いて目を開けていられるものではなかった。家々はぴったりと戸締りし、通りに人影は見られなかった。雷が、だんだん近付いてきているようだった。春の雷は危ない。幼い頃大人達から聞いた、そんな言葉を思い出した。水月はどうしているかしら。曹瑛は、水月の優しい目を心に浮かべた。

・・・・

杜愔は耐え続けていた。兵達の疲労はかなりのものと想像出来た。だが、経略使自らの督戦ということで、疲れを我慢して戦っているのだろう。杜愔はそう考えていた。
「経略使様、第一隊はもう限界です」
残ったただ一人の都監、興仁貴が叫び声を上げた。
「第三隊と交代させろ」
杜愔はそう命じた。確かに、第一隊をこれ以上前線に置いておくことは出来なさそうだった。五百人の部隊が、半数以下に減っているようだった。
「黒旋風か」
杜愔はそう呟いた。黒旋風一人に、一体どれだけの兵を倒されたことだろうか。敵ながら、さすがだと感心した。だが、本当に恐い男がもう一人いた。恐るべき短梢子の使い手だった。しかも、敵の動きをよく見ていると、この男が全体の指揮をしているらしいことが分かった。

「誰だろうな」
杜愔が興仁貴に訊いた。
「分かりません。兵達の中に知っている者がいないか訊いてみたのですが、誰も知りませんでした」
「だが、あの男が戦を仕切っておるようだ。平真が負けたのもあの男だ。ただ者とは思えぬが」
「この度の事態は、腑に落ちぬことばかりです。そもそも、何故禁軍がこのような戦いに駆り出されたのでしょうか。この戦の意義が分かりません」
興仁貴は、いかにも悔しそうだった。
「おまえもそう感じておるのか」
杜愔が穏やかに言った。
「はい。経略使様の前で、出すぎたこととは思いますが、私にはそう思えてなりません」
興仁貴の言葉には、思い詰めたような切迫さがあった。
「これはな、黄文柄と魯櫂が引き起こし、黄文柄が幕引きをしようとしておるものなのだ」
知府と言わず、黄文柄と呼び捨てにしていることに、興仁貴は気付いた。経略使様は怒っている。興仁貴はそう感じた。
「しかし、どんな戦であろうと、戦は戦だ。我等武人は、全力を尽くさねばならん」
「はっ。それはそうであります」
「おまえが疑問を持つのは分かる。儂もそうだからな。だが、どんな男であろうと、黄文柄は知府なのだ。命じられたら、それに従うしかあるまい」
そう言った後、杜愔は自嘲(じちょう)したようだった。興仁貴は、それ以上訊こうとは思わなかった。
「平真はいないものと思ってくれ」
杜愔が呟くように言った。
「怪我でもしたのですか」

「いや、怪我はない」
「では、どうして。平真の三尖刀がないと、奴等を抑えることは難しいかと」
「平真には、儂が任務を与えた」
「任務……」
「知らない方がよい。おそらく、平真は禁軍に戻ることはない。そう理解しておけ」
「はあ……」
興仁貴は、わけが分からないといった顔をしたが、あえて杜愔に尋ねることはしなかった。軍人としての杜愔を信用している。杜愔の下で働けたことに、誇りを抱いてもいる。
「それにしても、敵ながら見事なものよな」
杜愔は、痛快なことででもあるかのように言った。
「胸のすく漢達だ。儂も、奴等と一緒に戦いたいくらいだ」
「お戯れを」
「おまえだってそう思っておるのではないか。兵の死者も少ないそうだな」
「はい。何故か、命までは取ろうとしていないようです。黒旋風も、首を飛ばすとは叫んでいますが、実際は手足を攻撃し、手心を加えているようです」
「そうか、我々だけが必死になっておるのが、馬鹿馬鹿しくなってくるな」
「そのようなこと」
「よい。全力では戦う。それが武人の務めだ。しかし、あえて殺す必要はない。降参に仕向けていく。そういう戦いをせよ」
殺さずに降参に持っていく。それがどういう戦いを意味するのか、興仁貴には今一つ分からなかったが、とりあえずははいと答えておこう。
興仁貴はそう思うしかなかった。

・・・・・

いない。公孫勝は絶望的な気持ちに襲われた。小屋の前に繋がれているはずの、水月がいなかった。

残月から降り、公孫勝は叩きつけるように戸を開けた。雪華と黄玉が、驚いたように公孫勝を見た。九天玄女と時遷も、何事かという顔で、公孫勝を振り返った。

「曹瑛が……」

九天玄女が、急に真剣な表情をした。公孫勝がこれほど動揺している姿を、これまで見たことがなかったからだった。

「まさか……」

雪華が絶句した。黄玉は、凍りついたように固まっている。

「曹瑛が、太原府に向かったらしい」

公孫勝は、やっとのことでそこまで言った。

小屋のなかの四人が、一斉に固唾を呑んだ。

「曹瑛……」

雪華が身体を起こした。黄玉は、今にも立ち上がりそうだった。

「断定は出来ぬが、ほぼ間違いないことと思う」

公孫勝が苦しそうに言った。

「あの娘ならやるだろう」

九天玄女だった。

雪華と黄玉が、ほとんど同時に叫んだ。

「お願いです、公孫勝様。曹瑛を……曹瑛を死なせないで」

二人は、公孫勝に深々と頭を下げた。

「もとより、そのつもりだ。私はすぐに太原府に向かう」

「入雲竜、死なせてはならぬ。地会の星は、これからの世に欠かせない者。こちらのことは何とかする。時遷も出す」

九天玄女も真剣だった。

「玄女様、ありがとうございます。あの娘は、この二人と共に、この世に必要な者だと思っていました。私の方から玄女様に願い出て、太

原府に向かおうと思ったところです」
時遷が言った。
「時遷殿が同行してくれるのはありがたい。こういうことにかけては、私より遥かに役に立つ」
公孫勝が、頼もしげに時遷を見た。
「馬をお借りしてもよろしいかな」
時遷が黄玉に訊いた。
「普通の馬では、とても公孫勝様の馬にはついて行けそうにない。出来ましたら黄玉殿、あなたの馬をお借りしたい」
黄玉はすぐに肯いた。
「蒼月を使ってください。十分残月について行けます」
「ありがとうございます。今度の仕事は頼まれたものとは思っておりません。私自身が望んだ仕事。そう思っております。曹瑛殿を救い出すことが出来るかどうかは分かりませんが、この私の誇りにかけて、全力を尽くすことはお約束します」
時遷はそう言って、二人に軽く礼を執った。
この人と公孫勝様なら、不可能を可能に出来るかもしれない。雪華と黄玉は、そう心に感じた。
「幸いと言っては変だが、春雷が我々の脱出を助けてくれそうだ。曹瑛も、それだから行ったのだろうが」
「お願いします。公孫勝様、時遷様。曹瑛にもしものことがあったら、わたしは……」
黄玉は涙を流していた。
「入雲竜、行くのだ。黒旋風には、私から伝えておく」
九天玄女が促した。
「玄女様、行きます。二人をよろしくお願いします」
公孫勝は、そう言って表に出た。戸を開けた途端、狂ったような雨と風が、小屋の中を吹き抜けて行った。
時遷も、すぐに小屋の外に出て行った。ただ、何か用意するものがあるらしく、公孫勝に少し待ってほしいと叫んでいた。

ほどなく、残月と蒼月の嘶きが、荒れ狂う風を裂いて聞こえて来た。二頭にも、曹瑛のことが分かるのか、その嘶きはこれまで聞いたことのないほど力強いものだった。

二頭の蹄の音が遠ざかって行く。

「水月の悲しみが、伝わったのかもしれない」

雪華は、消え入るような声で呟いた。

・・・・

宮城が見えてきた。ここまでは、誰にも見られなかった。曹瑛は、肩から矢壺を下ろして胡服の袖を縛った。矢を射るのに邪魔にならないようにするためだった。桃花色の胡服だった。ずぶ濡れにはなっていたが、薄暗い辺りの景色の中で、それは一際鮮やかな輝きを放っている。時折、雷光が辺りを照らし出し、いっそう桃花色を浮かび上がらせた。

「この色は、黄玉が選んでくれたもの」

曹瑛は、自分自身に語りかけた。伍小母さんが用意してくれた荷の中には、多くの着替えが入っていた。娘が三人、さすがに伍小母さんは気をきかせていた。その中で、黄玉が絶対似合うからと押し付けたのが、この桃花色の胡服だった。曹瑛自身は、こんな派手な色は好きではなかった。だが雪華も黄玉に賛成し、こんな綺麗な色は自分達には似合わないからと押しきられたのだった。動きやすいようにと、伍小母さんが用意してくれた衣服は総て胡服だった。結局、曹瑛は折れた。雪華は杏色の、黄玉は水色の胡服を選んだ。あの時はあんなに気に入らなかった桃花色の胡服だったが、今こうしていると、この色でよかった、そう思えてくるのだった。

突然、右肩を叩かれた。心の臓が飛び出るかのように驚いた。

「曹瑛殿……かな」

曹瑛が振り返ると、二人の男がずぶ濡れで立ち尽くしている。曹瑛の肩を叩いたのは、五旬※ほどのがっしりした男だ。片腕を紐で固定

している。怪我でもしているようだった。もう一人は、涼しげな目をした若者だった。薄暗い中でもはっきり分かるほどの、鮮やかな錦の戦袍を身にまとっている。※五旬　五十歳。

「あなた達は……」

曹瑛は、震えそうになる声を、やっとのことで抑えた。

「驚かせて済まなかった。あなたが南門を抜けるのを見て、つい、ここまでつけてしまった」

二人は、どことなく似た面持ちをしていた。親子かもしれない。曹瑛はそう感じた。

「確かに……曹瑛です」

「やはり、そうであったか。黄玉殿はどうしておられる」

「黄玉……ええ、元気です」

嘘ではない。曹瑛は、そう自分に言い聞かせた。移植で傷を負ってはいた。だが、元気かと問われれば、そうでないとは答えにくい黄玉の様子だった。

「それはよかった。私は楊佶、黄玉殿とは刃を交えた仲です」

曹瑛は思い出した。黄玉が戦った武将の一人だ。もう一人は死んだ。黄玉はそう言っていた。

「これは、息子の楊林。あなた達宋家党の信奉者だ」

楊林と呼ばれた若者が、曹瑛に礼を執った。爽やかな好男子だった。

「全然気付きませんでした。わたしは未熟です」

曹瑛は、恥ずかしさに顔を俯けた。

「この嵐では仕方のないことです。私達親子も、この嵐を利用して、亀伏山に入ろうと思っていたのですから」

「なぜ、亀伏山に」

「微力ながら加勢したい。そう息子が言い張るもので」

楊佶が嬉しそうに言った。息子の楊林の言葉を嬉しく思っているのだろう。曹瑛は楊佶を見て、そんな印象を受けた。

「南門を潜ろうとしていた時に、あなたを見かけた。楊林が、あなたを曹瑛殿だと言ったので、失礼とは思ったがこうしてつけさせてもら

った。
あなたに、渡したいものがあったのだ」
「私は、曹瑛殿、あなたを見知っていたのです。もちろん、こうしてお会いするのは初めてですが」
豪雨の中でも、よく通る声だった。敵ではない。曹瑛は確信した。
楊佶が、懐から何かを取り出した。稲光が、一瞬辺りを真昼のように照らし出した。曹瑛は、差し出されたものを見た。
「これは……」
曹瑛が言葉を詰まらせた。それは、見覚えのある小刀だった。
「府の検視官に私の友がいる。その友に頼んで、これを譲り受けた。曹瑛殿には、大切なもののように思われたので。もっとも、詳しいことを知っていたのはこの楊林で、蒋唐殿の小刀を形見にと言ったのだ」
曹瑛は蹲っていた。豪雨でよかった。曹瑛はそう思っていた。溢れ出す涙を、雨が隠してくれている。
「蒋小父さん……」
曹瑛は、何度もその名を呟いた。宋家村の仲間以外で、最も自分に優しくしてくれた人。曹瑛はその小刀を、やや暫く胸に抱き締めていた。
「やはり大切なものであったか。持って来たかいがあった」
楊佶は、ほっとしたようだった。いらないものを持って来てしまったと、不安に思っていたようだった。
「ありがとうございます。これは、とても大切なもの。わたしにとっては、何よりも嬉しいものです」
曹瑛は、顔を上げて感謝をのべた。
「ところで曹瑛殿、砦の様子は」
楊林が訊いた。
曹瑛は、これまでの戦いの様子を簡潔に伝えた。
「そうですか。禁軍の総攻撃が……」
楊林が唸った。楊佶は、暫く考え込んでいた。

「経略使の杜愔将軍は、戦慣れした名将だ。本気でかかっているとすれば、厳しいものになるだろう」
楊佶は杜愔を知っている。都虞侯の平真とは、気心の知れた仲でもある。
「平真はどうしているか分かりますか」
楊佶が訊いた。
「いえ、わたしには」
李逵達なら、その名前を知っているかもしれなかったが、曹瑛はその名を耳にしてはいない。
「今は、その公孫勝という人が指揮を執っているのですね」
楊林だった。
「墨家の流れをくむ人なら、こうした戦いには最適だとは思うが、経略使様もあまくはない。幸い、その方が禁軍側に知られていないことは有利なことだと思う」
楊佶が言った。そして、曹瑛の目を見つめた。
「曹瑛殿、あなたがここにいるということは……」
曹瑛は、楊佶の視線を避けた。
「狙いは黄文柄。そうなのですね」
言ったのは楊林だった。曹瑛は、仕方なく肯いた。
「一人でですか」
楊林の声には、驚きと心配がないまぜになっていた。曹瑛は、肯くしかなかった。
「無謀すぎる」
楊佶が、呆(あき)れたように言った。
「宮城には、警護が三百ほどは常駐している。今は禁軍が攻めているから、警護を増やしているとは思えぬが、それでも一人で出来るものではない」
そうも付け加えた。
「困難なことは分かっています。ですが、このまま何もしないでいては、いずれわたし達の方が力尽きてしまうのは目に見えています」

楊佶と楊林は、反論する術がなかった。
「雪華姉さんも黄玉も、まだ動くことは出来ません。男の人では警戒されてしまいます。女のわたしこそが適任なのです」
曹瑛はそう言って、手にした短弓を握り締めた。
「けれど、成功する可能性は低い」
楊林だった。
「その通りだと、わたしも思います。ですが、たとえ失敗しても、黄文柄には脅威になると思います。もしかすると、恐怖のあまり禁軍の一部を宮城の警備に呼び戻すかもしれません。そこまでいかなくても、砦を攻撃している禁軍の動揺を誘うかもしれません」
「そこまで考えてのことか」
楊佶が唸った。
「たとえ成功したとしても、警護の兵が一斉に集まります。還ることは不可能では」
楊林が言った。
「還ることは……考えていません」
曹瑛が、静かに言った。
二人は顔を見合わせた。暫くして、楊佶が口を開いた。
「どうしても、ということかな」
曹瑛は、黙って肯いた。
「分かった。私達も力を貸そう。砦に行こうと思っていたが、こちらの方が喫緊の事態だ。楊林、それでいいな」
「父上、もちろんです」
楊林が大きく肯いた。
「そんなことをしていただいては……」
曹瑛の口を、楊佶が塞いだ。
「私達が好きですることだ。遠慮は無用だ。楊林はともかくとして、私は黄玉殿に命を貰った。今こうして生き長らえているのは、人にとって大切な何かを為せ。そう教えられたからのような気がする。これは、まさしく大切なこと。曹瑛殿が嫌だと言っても、私は行く」

「父上、私もです。このようなこと、見過ごすことは義に反します」
楊林の顔が輝いていた。風雨も雷火も、一向に気にならないようだった。
曹瑛は、これ以上説得するのは難しいと感じた。
「それにしても曹瑛殿、あなたも美しい。黄玉殿を見た時、女神のようだと感心したが、曹瑛殿も美しい。黄玉殿とはまた違うがな」
楊佸は、そう言って楊林を見た。楊林は、照れたように目を逸らした。叩きつける雨の中で、曹瑛は静かに二人の様子を見つめていた。
「蒋小父さん、また小父さんと会えたような気がします」
曹瑛は、声にならない言葉を呟いた。

・・・・

慎重に木々の向こうを見つめていた。全身を黒い装束で包んだ男達が、かなりの速さで森の中を進んでいた。罠があちこちにあるはずなのに、まるで何もないかのように進んでいるのだった。それを目で追いながら、平真も森の中に足を踏み入れた。
杜愔に、あの薄気味悪い男の後をつけるように言われた。何故という問いに、杜愔はただ笑っただけだった。おまえは、そうしたくはないのか。逆にそう問い返された。その時初めて、自分はそうしたかったのだと気付いた。全身黒ずくめの、あの男に抱いた嫌悪感からだけではない。もっと切迫した、何か予感のようなもの。それが平真に、男の後をつけろと急かしているようだった。
「どういう訓練をしているのだ」
平真は小声で呟いた。足の周りだけでなく、顔にも手にも、容赦なく下生えや木の枝がまとわり付いてきた。時にはそれらで、小さな傷をつくることもあった。先を行く男達は、全く気にしていないようだった。禁軍でも、山中訓練や森の中の行軍を訓練することはある。佃戸出身の平真にとっては、そんなことは何でもないことの一つだった。郷村の二等戸※や三等戸出の子弟には、とても耐えられないような訓

練もした。だから自信もあった。簡単についていけるだろうと思っていた。

※二等戸、三等戸　土地を持った農民の等級。一等から五等に等級づけした。
この下に、小作人である佃戸または客戸などがあった。

「くそ。ついていけるのか」

思わず弱気になりそうな自分を、懸命に叱咤した。ついていけるかではない。ついていかなくてはならないのだ。そう平真は決心した。

砦の右側、深い谷の方の森だった。平真が一度試して、あまりの罠の多さに諦めた潜入路だった。黒ずくめの男達は、黙々と進んでいた。先頭には、あの薄気味悪い男がいるはずだった。確かに、あれだけ大きな態度をとるだけの力はあるようだった。だからといって、認めているわけではない。根本的な嫌悪感。何がどうだというわけではない。ただ、その存在すら忌まわしいものに思えるほどの拒否感。そうとしか平真は思えなかった。

それにしても、どうして杜愔はつけろと言ったのだろうか。そして、どうして平真が、そうしたいと心の中で思っていたのを知ったのか。自分自身でさえ気付かなかったことを。

「経略使様は、いつもと違う」

そう口に出した。今回の任務での杜愔は、明らかにいつもとは違っている。まるで熱が入っていない。そんな様子だった。ただ、初めの頃はそうではなかった。実際に戦いが始まってから、変わって来たと言うほかなかった。そして、決定的に変わったのは、あの黒ずくめの男が現れてからだった。

黒死軍と言っていた。それがどのようなものであるかは、平真には見当もつかなかった。宰相蔡京の私的な軍であるという。名目上は、童貫の禁軍に属しているのだという。そんなことが許されていいのかとは思う。だが今のこの国では、難しいことではないとも思う。蔡京の力は強大だった。一度ならず、宮廷を追われたことがあったが、いつの間にか中央に復帰して多大な権力を振るっていた。もともと、南の方でくすぶっていた蔡京を、宮廷に連れて来たのは宦官の童貫だっ

た。童貫が、徽宗の命を受けて杭州※に書画骨董を漁りに来た時に、童貫の手助けをしたのが蔡京だった。科挙出身の士大夫である蔡京は、書画骨董にも詳しかった。特に、骨董の真贋を見極める目はなかなかのもので、そちらの方が苦手な武人肌の童貫は、ずいぶんと助けられたようだった。それ以来の、同士とも言える仲だった。童貫は、西夏との戦いで軍功を挙げ、熙河蘭湟秦鳳路経略安撫使となり、今では開封府禁軍の最高責任者にまで昇っている。一方蔡京は、国の政治を一手に担う筆頭宰相にまでなっている。この二人が手を組んでいるのだった。出来ないことなど何もない。そう考えても間違いではなかった。蔡京は、政敵を追い落とすのに長けていた。崇寧元年※、元祐姦党碑※を造ったのはその最たるものだ。そうした政敵に対する厳しい弾圧を、表だけでなく裏でも行っていることは十分考えられることだった。一応は、王安石の新法を受け継ぐように見せていたが、実際は新法派の名を借りて、独裁の道を歩んでいるだけだ。そして、それを許して自らの趣味に没頭し、全くと言っていいほど政治に関心を示さないのが、今の皇帝徽宗だった。

※杭州　揚子江の南の大都市。後の南宋の首都臨安。

※崇寧元年　一一〇二年。

※元祐姦党碑　旧法党百二十人の名を刻み、姦臣と非難した碑。

「本当に、この国はどうなってしまうのだろう」

これまで、あまり考えたことのない思いが、平真の心の中に生まれていた。いや、そうした思いは、意識的に退けていたのかもしれなかった。平真は、病で死んだ父のことを思った。平真が物心ついた頃から、佃戸として一日中働いていた。地主は官戸で、八十頃※以上の田地を持っていたが、本来三等地※である田地を九等地として申請していた。そんな不正が許されるのも、官戸という立場と、ふんだんに贈る賄賂のおかげだった。しかも、田地は三十頃と申告していたのだった。父のような佃戸を、土地を持っているように見せかけ、その分の租税を逃れていたのだった。当然、父のような境遇の者は、田地を持っていないのに持っているとみなされ、その分の租税がかかってくる

のだった。役人は、そんなからくりを十分知っていたが、官僚同士の馴れ合いや賄賂の多さに負けて、佃戸や客戸の苦しみなど見て見ぬ振りだった。あまりの搾取に耐えかねて、奴僕※に落ちたり逃げ出す者も多かったが、平真の父は懸命に働き続けた。そして、そのために背骨を傷めて床に就いてしまった。それから三月もせずに父は死んだ。働きずくめの人生だった。何も楽しい思いをせず、父は死んでしまった。母もその七年後に、やはり病で亡くなった。母も、喜びなどあったのだろうか。平真には分からなかった。もしかすると、日々のささやかな出来事に幸せを感じたこともあっただろう。あるいは、子の成長に喜びを見出してもいたのだろう。しかし、その血と汗を流した労働に対する報酬は、あまりに少な過ぎるものだった。本来父が受け取るべき報酬は、そのほとんどが官戸や役人、ひいては国に搾取されていたのだった。

※頃　一頃は約5.6ヘクタール。

※等地　田を一から十までの等級に区分し、その等級で租税が違った。

※奴僕　佃戸と同じ小作人。多くは奴隷のように扱われた。

「この国にとって、民とは何なのだろう」

ふと、そんな思いが口をついた。

それはまた、民にとって国とは何なのかという問いでもあった。民があっての国であるはずだった。宮廷だけでは、穀物一つ作れはしない。

「これが国か。そして私は、そんなもののために生きているのか」

平真は、心が沈み込むのを感じた。

杜愔の顔が目に浮かんだ。

「経略使様は、私に生きる意味を捜させようとしていたのか」

突然、平真は口走った。そうであるかもしれず、そうでないかもしれなかった。だが、今一つの灯火が、心の中に点ったように平真には思えた。そうだ、生きる意味、それをまず捜しても遅くはない。

平真は身体の奥底に、清々しい力が湧き上がってくるのを感じた。

宋雪華。その名が頭の中に浮かんで来た。宋家党の中心。無実のま

ま拷問を受け、今は命まで奪われようとしている娘。
先を進む黒衣の集団の目的は明らかだ。宋雪華の暗殺。宋家党の主だった者と東汾山の兵は、禁軍の表の攻撃をしのぐのに精一杯のはずだった。嵐と、正面への集中。あの不気味な男は、これを狙っていたのだ。杜愔の心が伝わって来た。阻止せよ。そう杜愔は命じたのだろう。経略使として、開封府の指示に従わないわけにはいかない。それでも杜愔は、最後に自らの意志を貫いた。そして、その意志を託されたのが平真だった。
「やってやる」
平真は唇を噛んだ。父が笑ったように、心に感じた。

・・・・

開封府のうららかな陽だまりを、太平車を牽いた若者達が、威勢のいい掛け声をかけて行き過ぎていった。揚州門から城内に入ったと思われる。汴河※を行き来する漕船※も、日増しにその数を増しているようだった。一月ほど前に川底の浚渫も終え、行き交う船も、どこかのびのびとした様子だった。その汴河を東に見て、禹王廟※は、静かに春の陽射しの中で佇んでいる。

※汴河　開封府東南を流れる運河。南方からの大動脈。
※漕船　運搬船。
※禹王廟　伝説の聖王の廟。治水の神として知られている。

「宋家党は全滅していないのだな」
恐ろしく大きな男だった。身の丈は、ゆうに九尺はありそうだった。しかし、身の丈よりもその肩の盛り上がりこそ、この男を雄弁に語っていそうだった。腕は普通の女の胴ほどもありそうだった。脂などではなく、強靭な筋肉に包まれた仁王のような身体だった。
「はい。黒旋風が、相変わらずの奮戦ぶりを見せているようです」
もう一人の男が答えた。禹王廟には珍しく人が少なく、二人の他には、歳のいった老夫婦が一組いるだけだった。

「黒旋風だけではないだろう。入雲竜が手を貸していると聞いた。宋家党の若者達も必死に戦っているようだ。立派なものだ。十倍の禁軍相手に、一歩も退かぬとはな。どうだ、おまえ達にそんなことが出来るか。」

そう言ってはいたが、別に皮肉には聞こえなかった。

「元締めがおられましたなら」

男が答えた。

「儂などいても、さほどの役には立たん。せいぜい、黒旋風の代わりしか出来そうにないわ。入雲竜の代わりなど、到底儂には出来んだろう」

元締めと呼ばれた男が、おおげさに頭を振った。見事に禿げ上がった頭だった。年は四旬※の少し上。そのくらいに見えた。

※四旬　四十歳。

「元締めでしたら、黒旋風の代わりは十分務まります。入雲竜の代わりだとて、私には務まるように思われますが」

「燕順。いつからそれほど口がうまくなった。儂はおだてには乗らんぞ。おまえ達に担がれるのは、ほとほと疲れたわい」

「元締め。今、元締めがこの任を放棄されましたなら、再び江湖は分裂し、血で血を洗う侠達の抗争がぶり返します。十年前のあの大抗争を、二度と起こしてはなりません」

燕順と呼ばれた男が言った。年は、四旬のやや下のように見えた。身の丈は、それほど大きくはないが、やはり、岩のように頑丈そうな身体つきをしていた。髪と髭が共に黄色がかっているのが、特徴と言えば言えそうだった。

「あんな馬鹿げたことは、もう起こらん。いや、起こしてはならん」

元締めが断固たる口調で言った。

「そのための元締めです」

燕順が言った。

「もう十年もやっておる。飽きてきた。おまえがやればいいではないか。反対する者がおったら、この儂が仕置きしてやる」

「ご冗談を。元締めだから、各地の侠達が従っているのです。私などにそんな大任は務まりません」
「何を言っておる。おまえは儂よりも頭が切れる。それに腕の方も、おまえに敵う侠などそうはおらん。錦毛虎と呼ばれておるのはだてではあるまい」
元締めはそう言って、禹王廟に備えられている凳の一つに腰掛けた。
「それにしても、あの入雲竜殿が加勢なされるとは」
燕順が、訝しげに呟いた。
「そうだな。儂も、入雲竜は世俗のことには関らんものと思っておった。何が入雲竜を動かせたのかな」
「宋家党……ですか」
「それも、核である宋雪華」
「元締めは、父親の宋江を知っておられたのでしたな」
「ああ、よく知っていた。友と言ってもいいだろう。三年前に死んだが、惜しい男を失くしたものだと思う。宋江の父の宋湛にも会ったことがある。もろろん、侠を退いてはおったがな。二人共、まさしく大侠と呼ぶにふさわしい男達だった。宋江が生きておったら、儂は間違いなく元締めを奴に押し付けておったわ」
「娘もなかなかのものです」
「そうだろう。あの宋江の娘だ。会うのが楽しみだ」
「それにはまず、この難局を何とかしませんと」
「そうだな。太原府禁軍は何とかなっても、問題は開封府禁軍だ」
元締めは太い眉を寄せた。そうしていると、さすがに侠を束ねる大侠の貫禄が全身から滲み出ている。
「蔡京の奴、どのくらい出したのだ」
「二千と聞いております」
「二千か。太原府禁軍と併せると六千にもなるな。戦ではないか、これでは」
元締めが、吐き捨てるように言った。

「それだけ重大視しているのでしょう」
「女真族の阿骨打が絡んでおるのは、間違いないのだな」
「はい。太原府を抜ける時には、弟の呉乞買が硬軍を率いて太原府禁軍を蹴散らしています」
「硬軍か。禁軍の連中、驚いたことだろうな」
「現場を目撃した者によると、大人と子供のようだったと言っておりました。凄まじい破壊力だったそうです」
「そうだろうな。遼軍の中でも、女真軍は最強を誇っておる。その女真軍の中核が硬軍だからな」
「あの騎馬軍に立ち向かえるものは、おそらくありますまい」
「宋にはおらんだろうな。とすれば、西夏か」
「西夏なら」
「まあいい。女真族が遼と戦うのは、儂らにとっては好都合だ」
「呉乞買が、かなりの将になりそうです」
「そうか。阿骨打の奴、いい後継者を持ったな」
「ひょっとすると、女真族は独立を果たすかもしれません」
「それならそれでよい。遼の弱体化は、儂らの望み通りだ」
そう言って、元締めは腕を組み直した。
「ところで、太原府周辺をまとめておるのは誰だ」
「杜遷です」
燕順がすぐに返答した。
「摸着天※か。なら燕順、おまえが行く必要はないな」

※摸着天　天に着くほど背が高いという意味。

「はい、杜遷に任せておけば大丈夫かと」
「侠はどのくらいおる」
「本物は、およそ二千」
「何だ、もっとおらんの。」
「まがい物なら、二万は数えられましょうが、本物を選りすぐるとしましたら、その程度でしょう。この開封府とて、本物の侠は一万を少し上回る程度ですから」

「それはそうだが、向かうのは、おそらく首都禁軍の精鋭だ。装備にしても格段に上等だ。同数で止められるのか」
「ぶつかり合うような下策はとらぬでしょう。杜遷は、身体が大きいだけでなく頭も切れます」
「分かった。杜遷を信じよう。とにかく、宋雪華を死なせてはならん」
「亡くなられた宋江様への友情でですか」
燕順が、珍しく皮肉を込めて言った。
「いや、儂は宋雪華という娘に関心があるのだ。これまでの話を聞いておると、宋江のさらに上を行きそうな気がする。是非、直接会ってみたいものだ」
燕順が、初めて笑顔になった。
「さすがは元締め。私は、宋江様が亡くなられてから、娘を見続けてきました。まさしく大器です。宋江様は、確かに素晴しい方でしたが、惜しむらくは内向きでありすぎました。突き詰めて言えば、宋家村さえ守ればそれでいい。そんな印象でした。ですが、娘は違います。これまでは村の建て直しのために努力していましたが、その心の内には、秘めたる想いがあるものと感じました」
「そうか。おまえは時々、宋家村に出向いておったものな」
「はい。流れの鍛冶として」
「鍛冶か。なるほど、そう見えぬこともないな」
二人は大笑いした。遠くにいた老夫婦が、驚いた顔で二人を見詰めている。
「よし分かった。杜遷に任せよう。それにしてもな、燕順。なかなか面白いことになってきおったな」
「何かが動き出している。そんな気がします」
「春だからな。蠢動といったところか」
太い眉を寄せて、元締めがじっと興慈塔※を見詰めていた。
燕順は、この元締めについてきてよかったと、しみじみ思った。漕船が帆を立てて汴河を下って行くのが見えた。何かが始まる。そう思うと、浮き立つ気持ちが、燕順の心を満たすように感じられた。

※興慈塔　禹王廟の近くにある。後に繁塔と呼ばれた。